
講師紹介

TEACHERS



Pygmalion Ashiya

1st Edition



浅井 秀美 (アサイ ヒデミ)

New England School of English (ボストン) で半年間語学を勉強後、Pace University (ニューヨーク) にて、Speech Communicationを専攻し、米国四年制大学学士号(BA of Communication)取得。卒業後、現地の日本企業(旅行会社)に就職し帰国後は姫路市の各種国際交流プロジェクトに参加。日本とアメリカ(ハワイ)の小学校をインターネットで結び異文化交流するなど、その他多数の国際交流に貢献する傍ら学習塾を経営し、15年以上に渡り幼児～高校生の指導に携わってきた。勉強ができなくなってから入塾してくる多くの子どもたち、又受験の為だけの勉強や目の前の成績を上げるためだけのテクニックや指導に疑問を感じ始め、ピグマリオン学育研究所の伊藤恭先生を訪ねました。長年塾を経営し、それを糧に生活してきた言うのも何ですが、小・中学生が夜遅くまで学習塾に通わないといけない今の日本の教育は間違っている、塾をなくしたい(同じ塾でも、より高度で知的な事を学び合える素敵な場を提供したい)というのが、私の夢です。それを実現するにはどうすべきか。

ちょうど結婚、出産、子育ての時期と重なり、日本の将来を憂い、我が子の進路を真剣に考えた時、幼児期から無理なく、知識を教えこむことなく『教えずに学ばせる』ピグマリオンの学育メソッドに辿りつきました。私の娘は物心ついた頃からピグマリオンの教具をおもちゃにして遊んでいました。特に私が教えることなく、自分で考え、工夫し、いつの間にか高い空間図形把握能力、言語能力、数論理能力、集中力を身につけている娘を見て、日々驚かされるばかりです。本物の幼児教育こそ、私の夢を実現する答えだと確信しています。海外からのオファーもあり、イングリッシュ・ピグマリオンが誕生し、そのプログラムの研究・開発監修チームを率いるリーダーを伊藤先生から任されました。これからの時代はまさに、グローバル化とIT化がより加速度的に進んでいきます。我々の子どもたちは高い論理的思考力に加え、日英両方のコミュニケーション能力、そしてIT力が必須となることは言うまでもありません。芦屋校では、ピグマリオンの知育に加え、多読と英語イマージョンプログラムをベースとした『2歳からのバイリンガル英才教育』、幼児からのアプリ開発やプログラミングコースといったIT教育等、多彩なコースをご提供できるよう、日々世界が求める人材育成に目を向け、努力しつづけていきたいと思っております。

ボストン在住6ヶ月

ニューヨーク在住4年

英会話・塾講師15年、イングリッシュ・ピグマリオン代表、ピグマリオンぶち提携教室/Ashiya Mama Salon運営、mpi 認定講師(初級、中級、上級)

北川 直子 (キタガワ ナオコ)

大阪教育大学卒業後、大阪の市立小学校で教諭として3年間勤務した後、JAIMS (Japan America Institute of Management Science ハワイ) にて6か月の短期留学しました。その後渡米し、ニューヨーク、ナッシュビル、ロサンゼルスにて、18年間過ごしました。この間、ニューヨークで2児を出産。子ども達が現地の学校で学ぶ事を通して、アメリカにおける幼児から高校までの教育に直接触れることが出来ました。また、現地校のPTA活動にも参加する機会を得、アメリカの教育制度も体験してまいりました。ナッシュビルはアメリカ中部のカントリーミュージックで有名な都市です。ここでは日本という国を知らない人も多かったので、

Cumberland Science Museum (現在Adventure Sciences Center) でアメリカの子ども達に日本を紹介するプログラムをボランティアとして行い、現地主催団体から「Outstanding Volunteer Service」の賞を頂きました。また、日本人のコーラスグループを指揮し、現地の人々に日本の歌を聞いていただく、文化交流の活動を行いました。ロサンゼルスでは、Mt. San Antonio College にてThe degree of Associate in Arts を取得し、California State Polytechnic University PomonaでTESOLの講義を受ける事ができました。帰国後、大手塾にて7年間小学生から高校生を対象に主に受験英語を教えておりますが、もっと低年齢からの子どもの教育の必要性、可能性を感じ、幼児教育を学ぶ中で、ピグマリオンメソッドを研究する機会を得、イングリッシュピグマリオンの翻訳、開発に携わる事ができました。アメリカで最初に感じた事は、日本とアメリカでの教育における一番の違いは、日本では「子ども達は同じ～」という観点からスタートし、アメリカでは反対に「子ども達は違う～」という観点からスタートしている事です。アメリカでは就学を始める時期さえ、親が自分の子どもの発達を見て、一年早めたり、あるいは遅めたりできます。学習内容もその子の理解の速さに従って、それぞれの科目



での進度、内容が変わってきます。一方、日本の教育は全員、同じ線上で基礎学力を身につけさせ事に重点が置かれています。結果として、日本の識字率の高さは昔からとても高いのは、その教育の所以だと言えます。違った教育制度の下でも、子ども達に共通して重要だと思う事は、こども自身が「自ら学ぶ力、考える力」を持つ、その力を養うことだと感じます。「考える力」の低い子どもは、思考の壁にぶつかった時、手助けしても、その壁を乗り越えることがとても困難です。それはどのように考えていいのかわからないからです。そのような子どもを日本の教室の中で、沢山見ました。その壁を難なく乗り越えていく子どもは、最初はわからなくても、色んな角度から考え、それを乗り越えようとします。その思考力「考える力」をピグマリオンの教材は、一番効果の高い幼児期に育て伸ばそうとするものです。幼児期にこのような教具 教材に出会えることは、こどもにとって一生の財産となる事でしょう。私の子どもはいわゆる帰国子女ですが、日本の社会に入る時には、異文化に入る摩擦を感じていました。今やグローバル時代～ 確かに英語を話せる事は就職の時にも一つの強みになります。しかし、本当に英語でコミュニケーションができる、というのはただ単に英語が話せるという事ではなく、その言語の後ろにある文化を知り理解することです。異文化を知るという事は違う価値観を学ぶということで、それによって自分が育った文化を見直す機会となる事が往々にしてあります。これから英語を学んでいく子ども達には、是非、異文化も学び、自分の国の文化にも目を向け、それを英語で発信できるようになって欲しいと思っております。ピグマリオンの知育と、多読、フォニックスを中心とした英語教育は、相乗効果をもって子ども達に高い能力を与えられる教育です。子ども達はその教育の中で大きく成長する姿を見るのは、私にとって大きな喜びです。少しでもその成長の手助けができるように、私も日々努力していきたいと思っております。



Nadinee Kamata

ナリニー 鎌田 (ナリニー カマタ)

Coming Soon

長谷川こずえ (ハセガワ コズエ)

大阪教育大学卒業

アメリカ New Hampshire 州 Belmont

Elementary School にて1年間勤務。

2児の母。

知識を与えられるだけの教育の在り方に疑問を感じ始めた頃、ピグマリオンの学育メソッドに出会いました。特に私自身ピグマリオンの中で一番魅力を感じている能力の1つが、空間図形把握能力です。今までアメリカ、日本に関わらず、イライラしたり、一時の感情に流されがちな子ども達をたくさん見てきました。目の前の空間を把握し、1方向のみ観るのではなく、複雑な形や物事でも全体を捉えて思考できる力は、生きていくうえで必要不可欠な能力だと、現在2児の母であり、日々我が子の子育てを通して改めて実感しています。学校の宿題が嫌いな息子も、ピグマリオンの問題なら出来るまで取り組みます。時には泣きながらも。達成感があるのか？面白いのか？すぐにあきらめず、今の自分のありったけの能力で考える。学力とは、知識を詰めることではなく、まだ閉まっているたくさんの見知らぬドアを探し当て、自ら開いていく力のようなものではないかと感じています。この発見の連続こそが、将来を生き抜いていく子ども達に必要な知恵、本当の学力につながる

のではないのでしょうか。教えられるのではなく、自ら考え、気づく。 お子さんは知る楽しさを知り、何のために学ぶのかを感じとる。学ぶことが大好きになるでしょう。また、児童英語講師として英語習得の難しさを感じてきましたが、多読学習に出会い、一筋の光を見た思いです。多読には、英語力の向上はもちろんのこと、お子さんの世界感を広げ、心まで豊かにしていける効果があるからです。興味があれば、子どもはまるで日本語のように、語彙や知識をどんどん吸収します。我が子も教材である英語の絵本は大好き。音声のまねをしていたかと思うと、いつの間にかスラスラと声に出して本を読んでしまいます。ともあれ、子育ては悩みと学びの連続。つい周りの子と比べてしまったり、感情的に叱ってしまったり。逆に子ども達から気づかせてもらうことも。決して放置はしない、けれどもできる限り教えない。その子の能力を引きだす。一人でも多くのお子さんが、ピグマリオンの教育方針に巡り合い、楽しみながら本当の学力を身につけて欲しい。そして目の前の課題から逃げず、何事に対しても前向きな気持ちで最後まで取り組む姿勢を学びとって欲しい。そのサポートをさせて頂きたいと考えております。



Kozue Hasegawa



Eric Cincilipini

Eric Cincilipini (エリック)

Coming Soon

浅井 三継 (アサイ ミツグ)

Coming Soon

